

# 景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 Town Design Aid, Japan <http://www.tda-j.or.jp>

2021-10-01



ソウル市ソンドン区

## 目次

- P1  
 ■巻頭  
 過剰性能が広がる韓国の都市景観  
 ②バス停がスマートである必要性は？ / (写真・文) オム・ジョン
- P2～3  
 ■TDA NEWS  
 大学研究室紹介  
 『「景観」を実践するバス停』～東京  
 大学大学院・岡部研の活動～  
 / 岡部 明子・正林 泰誠
- P4  
 ■身近な景観をつくる  
 第2回 生垣のようなもの  
 / 井上 洋司
- 「生物多様性」を通してヨーロッパ  
 の都市と生活が見えてくる その1  
 / 並河 みき
- ホワイトボード

### 過剰性能が広がる韓国の都市景観 ②バス停がスマートである必要性は？

53号に掲載した「増殖するパラソル」編のように近年韓国で全国的に拡大している公共施設物がある。「スマートバス停」という名前のバス停だ。既存のバス停とは異なり、内部施設はIoTを活用して統合管制センターから遠隔で制御・管制している。また密閉式で空気清浄機能や冷暖房、UV空気殺菌機能、発熱チェック、その他有無線充電器、無料Wi-Fiなど多様なスマート技術を採用し、バス利用だけでなく街の憩いの場として市民が快適に利用できるようにするのが特徴的だ。すでに首都圏では数年前から設置が完了し運営中であり、今後は政府のスマートデジタル推進政策に合わせて全国23自治体ではスマートバス停が本格的に広がり設置される予定だ。

しかし、スマートで完璧に見えるこの新しい未来型バス停は、いくつかの問題がある。まず一つ目に、新タイプのこのスマートバス停は区ごとに特性を創出することが主で、色も形状もバラバラな姿で随所に現れているため街の景観を乱している。既存の景観ガイドラインにこのバス停の項目を追加する景観整備を行う必要があると考えられる。

二つ目は身体障害者を配慮した設計がされていないことだ。現在は誘導ブロックやサイン、出入口の数や位置もUD基準がないまま設置されているため利用者の円滑な移動が不便なことになっている。公共交通は多様な市民が利用するため、スマートバス停が提供する便利な機能がユニバーサルデザインの観点で正しく適用される必要があると考える。しかし、いまだに政府や自治体でも明確に基準を設けてないためスマートバス停にユニバーサルデザインが正しく適用されるよう、行政と専門家でガイドラインをつくる必要がある。

前編で話した韓国のオーバースペックにする景観問題は、街のパラソルだけでなくバス停など様々な公共施設物で現れている。微細粉塵や地球温暖化などの環境変化による対策として、施設物の形態や機能が変化しなければならないということは納得しているが、単に新しい変化を好み、スマート技術を優先する傾向から、このようなオーバースペック施設物が拡散することが最大の問題であると考えられる。果たしてこのような施設物が都市の本質的な問題を解決し、市民のためにどのような機能が必要とされるか十分に検討し、議論された後に拡散し定着されなければならないと思う。必ずしも新しく機能がたくさん入っている「スマートな」ことだけが良いわけではない。

都市デザイナー / TDA 正会員 オム・ジョン

## 大学研究室紹介

## 『「景観」を实践するバス停』

～東京大学大学院・岡部研の活動～

現在、『景観文化』では、新規連載企画として、地域の景観形成やまちづくりに主眼をおいて活動している大学の研究室の活動を紹介するコーナーを制作しています。国内外問わず、次世代を担う若者たちが、今後の景観形成やまちづくりについてどのような視座を持って取り組んでいるのかということをご紹介したいと考えています。

こうした、新規連載企画に先駆け、今回は、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻の岡部研究室の活動についてご紹介します。

岡部研究室では、EUの都市戦略やジャカルタ(インドネシア)の高密度都市の研究を行う一方で、日本の地方都市(房総半島の南端に位置する千葉県館山市)での研究を実践的に行なっております。建築を学ぶ学生たちが、商店街の空き店舗や空き家となっている古民家など、人口減少社会で使われなくなった物的環境を介して、どう地域の人たちとかかわりをもち地域の担い手となれるか、実践を通して探る活動です。地域コミュニティの日々の営みの変化によって里山の循環がケアされなくなった今、都市住民に開かれたしくみで、地域の循環を継承することが求められています。当該研究室でもその再構築が課題となっているとのことです。



写真1 かやぶきゴンジロウ

岡部 明子 東京大学大学院 教授

岡部研究室の修士学生メンバーが中心となり、2009年から、千葉県館山市塩見にある茅葺民家ゴンジロウ〔写真1〕を拠点に建築まちづくり実践活動を行ってきた。これまで、茅刈り、茅葺屋根の葺替え、拠点としているゴンジロウの土間や炊き場の再生をした。学生たちが地域維持に貢献しているというよりは、どちらかという地元のみなさんに厄介になってきたと感じている。

私たちの活動は、「景観とはいったい何だろう」と問い続ける道程だった。

発端は、集落の少し高いところにある神社の木の間から茅葺屋根がのぞいているのを認めたことだった。「あれがなくなってしまうたら、塩見の里は、葎をとられたショートケーキになってしまう。この風景に出会ってしまったからにはなんとかしたい」と思った。

このように「景観を守りたい」と人は思うことがあるが、美しいと感じ「守る」対象であるところの「景観」とは何なのか。

最初は漠然と即物的な茅葺屋根だと思い込んでいたが、茅は普通に手に入る材料ではない、茅葺職人もなかなかいないことを知るうちに、景観は対価を払いさえすれば維持できるものではないことに気づいた。私が守りたい、取り戻したいと思っている「景観」は、近場に自生している材料で家を建て屋根を葺くという人と場所とのつながりそのものだ。村総出で葺き替えることで、「景観」を媒介として人と人がつながっていて、困りごとがあつたらともに問題を処理できる安心だ。

「乱れた景観」は、人と土地とのつながり、場所を介した人と人とのつながりが狂っているという警告として受け止めるべきではないか。「景観」をよくすることとは、人と具体的な場所とのつながり、「景観」を介した人と人とのつながりを修復することではないのか。「景観」とは、形や色のあるモノというよりは、つきつめれば人間と環境の関係性そのものだといえる(河合2020)。

「人間は生存し、存在する限り、自分の居合わせる〈環境〉から逃れることはできない。逃れられない〈環境〉をより良く生きるための関係とは、どのような関係であり、それはどうやって持続的に醸成されて

いくものなのか。(増田2020)」

こうした「景観」への問いから、最寄りのバス停「安房塩見」が生まれ変わった。

その物語を、この春からゴンジロウにひとり住み、週末になるとリヤカーを引いてバス停まで行き、そこで一杯のコーヒーを介して地域の人びとや通りすがり人たちとつながってきた正林さんに綴ってもらうことにした。

正林 泰誠 東京大学大学院 修士課程

## バス停を作るきっかけ

2018年、ゴンジロウの最寄りである安房塩見バス停が強風によって損壊した。それをきっかけに、バス停を塩見集落の方々と学生で作りに上げることとなった。そこで、どうしたものかと知恵を出し合っていたとき、裏山の持ち主が、ふと「木を何十年も前に植えたけど、使う計画もないからそのバス停のためなら伐ってもいい」とつぶやいた。ただ、道のついていない山から木を運び出すのは容易ではない。立木のまま皮剥きして放置して軽くしてから伐採した〔写真2〕。その直後、2019年の台風で先代のバス停は全壊した。

そこで、資金をクラウドファンディングで集め、木立たちを柱としたバス停を完成することができた〔写真3〕。

## まちの景観としてのバス亭

バス停というのは実に魅力的な場所であると考え。どんな地域にもありながらも、どこの誰だか知らない人同士が時間を共にする。特に館山の駅から離れた地域では、車のない高齢者にとって、バスはなくてはならないものになりつつあるからである。そんなバス停を地域特有の景観としての価値を見いだすことはできないだろうか？ そのために、単純なバスが停まるためのバス“停”ではなく、人の居場所としてのバス“亭”のあり方について私たちは考え



写真2 裏山から木を伐採す



写真3 バス停完成時、バス会社の人たちと

ている。そこで、このバス“亭”がまちの景観として存在するために必要だと感じた2つの理由について、実践をもとに述べたいと思う。

### 1. 内と外が交差するバス“亭”カフェ

私は安房塩見バス停で、改造したリヤカーでコーヒーサービスを行う通称バス“亭”カフェを週末開いている。そこには地元の常連さんも、観光客や移住者もやってくる〔写真4〕。地域の人たちにとっては記憶や歴史が積み重なっている場として利用する一方で、その土地の背景を知らない観光客は直感的に場所としての居心地の良さを感じて利用してくれる。同じひとつのバス停ではあるが、地元の人への見え方である「内的景観」と他者が受ける印象「外的景観」は異なる。景観人類学のアプローチから指摘されているとおりである(Stewart and Strathern 2003)。こうした内の人と外の人々が偶発的に交流し、両者の印象を共有できるのがバス“亭”という場所だと思う。お互い意図せずに気づけなかったまちの側面を知ることができるのである。そういう意味で「内的景観」と「外的景観」が交差することを生み出すことで、



写真4 地域の人びとが集まってくる

新しいまちの景観を作り出すことができるのではないだろうかと考える。今までは自治体の政策などを見ても、住民サービスと観光振興をそれぞれのものとして捉えているが、バス“亭”を運営していると、その境界を行き来しながらまちを捉えることが必要になってくると感じるからである。

### 2. 更新に参加する

また、バス“亭”は完成せずに更新され続けるようにしていきたいと考えた。地元の人がやってくると、「背もたれとして使いたいから、ここの枝を切って欲しい」といったバス停への要望をよく聞く。こういった声をたくさん聞き、少しずつではあるが、人の居場所としてバス“亭”を更新している。また、通りすがりの音楽好きのおじさんがやってきた時は、その方のギターと私の趣味のサクソで即興ジャズ演奏をすることもあった。このように、人が入れ替わり立ち代わりやってきて、場がまるでジャズの演奏かのように即興的に変化し、更新されていってほしいと願っている〔写真5〕。

ここで重要になってくるのが、訪れた人、そして、私が、その更新に「参加」しているということだと思う。これは環境美学の論者であるアーノルド・バーリアントが論じた「参与の美学」に関わる(Berleant 1991)。つまり、主体となる人が、バス“亭”を介し参加することで、その環境を価値のあるものとして捉えることができるのだ。

また、居場所の更新に参加することで、バス“亭”を家の延長のような居場所



写真5 地域の人と観光客が時間を共にする

として捉えることができないだろうかとも考えた。コロナ禍で自宅と職場とは違う「サードプレイス」(オルデンバーグ 1989=2013)が注目されている。ただ、バス“亭”は「サードプレイス」とも少し異なり、第1の場所の延長として存在できると思う。どこかの場所まで行く途中にバス“亭”があって、それを皆で家の庭を手入れする感覚で更新していくからである。これにより、バス“亭”をまちの景観としての価値を見いだすことができると私たちは考えている。

### 最後に

今後もさらに活動を広げていきたいと考えている。例えば、地域の野菜をバスで運び、その場で私がおつまみを調理し、そこにお酒を地元の方が持ってくる。または、一緒にバンドを組んで即興演奏することもできたらいいなと思っている。館山に訪れる際は是非、安房塩見バス“亭”の更新に参加していただきたい。

#### 〔参考文献〕

Berleant, A. (1991). *Art and Engagement*, Temple University Press.

Stewart, P. J. and Strathern, A. (2003). *Landscape, Memory and History: Anthropological Perspectives*, Pluto Press.

オルデンバーグ, R. (1989=2013) 『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地のよい場所」』 みすず書房

亀山純生 監修・増田敬祐 編集 (2020) 『風土的環境倫理と現代社会』 農林統計出版

河合洋尚 (2020) 『景観人類学入門』 風響社

## 第2回：生垣のようなもの

ある街で、斜面をいかしピスタを大切にしたい“まちづくり”をしているところがある。切り土、盛り土、客土で、造成された街の土壌状況は決して植物にとって好ましいものではない。だからか経済的には知らないけれど生垣は作られていない。住宅街を歩くと、擁壁のコンクリートと、ネットフェンスばかりが目につく。遠望は大きな緑や海を取り込んだ素晴らしい計画であっても、近景に緑がないのは寂しいものである。ネットフェンスは味気ないし、中が丸見えだ。あまり良くない土でも、既にあるネットフェンスを緑化し、比較的手間のかからないものがある。

テイカカズラというツル植物(写



写真1 普通のネットフェンスの緑化例

真1)。写真の事例は1.8mのネットフェンスに長さ30cmほどの苗を植えて3年～4年といった所だ。テイカズラは常緑植物で、花は咲くが目立たないので季節感が伝わりにくい。季節感を出したい方は、多少のメンテはかかるが、少し変わった生垣をご紹介します。これはネットを使ったモッコウバラの生垣だ。季節になると沢山の花を咲かせてくれる(写真2)。ただ成長が速い分、年3回程度の剪定作業が必要だ。

このようなネットなどを使った植物の育成方法をトレリス育成と言うが、利点は、



写真2 ハウスメーカー住宅にトレリス(左)モッコウバラの満開時期(右)

直ちにネットによるセキュリティ確保が出来る事、一般の生垣より幅が狭く、庭を広くつかえる事、欠点はツル植物だから成長するまで多少時間がかかる事だ。

さて最後にイヌマキを生垣にした例だ(写真3)。誰が設計した訳でもなさそうだけれど、これはなかなか出来ない。隣り合う家同士が、同じ植栽で生垣を作るというとても単純な仕掛けで、景観を整え、この2項道路と思われる小道をかなり豊かにしてくれている。出来そう出来ない。住む人の人間関係まで想起させる生垣。

トレリスによる、このような小道もいざれ何処かに出現するのではないだろうか？

そう、景観とはささやかな日々の営みが創りだすものでもあるのだ。

参考/拙著「ローメンテナンスでつくる緑の空間」：彰国社(2014年発行)



写真3 両隣が植栽の小道

## 「生物多様性」を通してヨーロッパの都市と生活が見えてくる その1

登録ランドスケープアーキテクト(AILA)/TDA正会員 並河 みき

このシリーズではベルギー王立自然科学研究所により制作され、EUが英語版で公開している「生物多様性のための52のアイデア」(2011年)の翻訳を通して、私たちの生活が生物多様性に及ぼす具体的な影響と、そのすそ野の広がり共有したいと考えています。

私は景観の根底に存在するシステム(様々な要素が影響を及ぼし合うしくみ)に、関心があります。それは例えば、自然における移入、帰化、侵入による植生変化であり、都市と自然や、ひとと自然の関わり方です。そして、景観はこうしたシステムの上に立ち現れるものと捉えています。

近年、このシステムが大きくバランスを崩し始めている、もしくは、バランスを崩したことが明らかになってきたと感じています。今見えている風景は、過去におけるひとと自然の関係性を映し出す残像で、近い将来にそれは驚くような風景へ変化してしまうかもしれない、という危機感です。

こうした表面上には見えないシステムの例として、生物多様性があり、その保全と回復はUN SDGsの中で15番目の目標「Life on land」に挙げられています。気候変動や生物多様性はその関連する要素の連鎖範囲が広いと、身近な対応策を見つけにくいのではないのでしょうか。このブックレットには1年間52週分のトピックが用意され、毎日の生活の中で使ってもらえるように工夫されています。その内容も、個人が日々の生活の中で取り組める題材を中心に、生物多様性保全のための既存制度や団体の紹介、都市環境の中での生物との関わり方などが紹介されています。読み進めると、ヨーロッパにおける都市の規模や、自然との距離感、人々の暮らし方までもが垣間見えるようです。

EUより英語版ブックレットの翻訳許可を得て、少しずつ翻訳を進め、私のフェイスブックで今までご紹介してきましたが、この掲載機会を頂いてさらに多くの皆さん

と共有できることをうれしく思います。

この翻訳を終えたのちは、姉妹版として日本を含むアジア地域における、アーバンデザイン及びランドスケープの視点からみた生物多様性への取り組みを、ブックレットにしたいと考えていますので、そちらもお楽しみに。



EUより公開されているブックレットの表紙

## ホワイトボード

前号に続き、新たな連載を始めました。EUの生物多様性のブックレットの内容について紹介してもらいます。並河みきさんは、日本で都市デザインを学び、オーストラリアの大学院を卒業後、現地の設計事務所を経て、ランドスケープ・アーキテクトとし

て、日本とオーストラリアの2つの拠点で活躍されています。前号からのオム・ジョンさんの韓国の報告など、今後も海外の情報も積極的に紙面で紹介していきたいと考えています。

※編集の都合により、ランドスケープ事情を今号はお休みしました。